

L 5.43

4 of 6

Apr. 1945

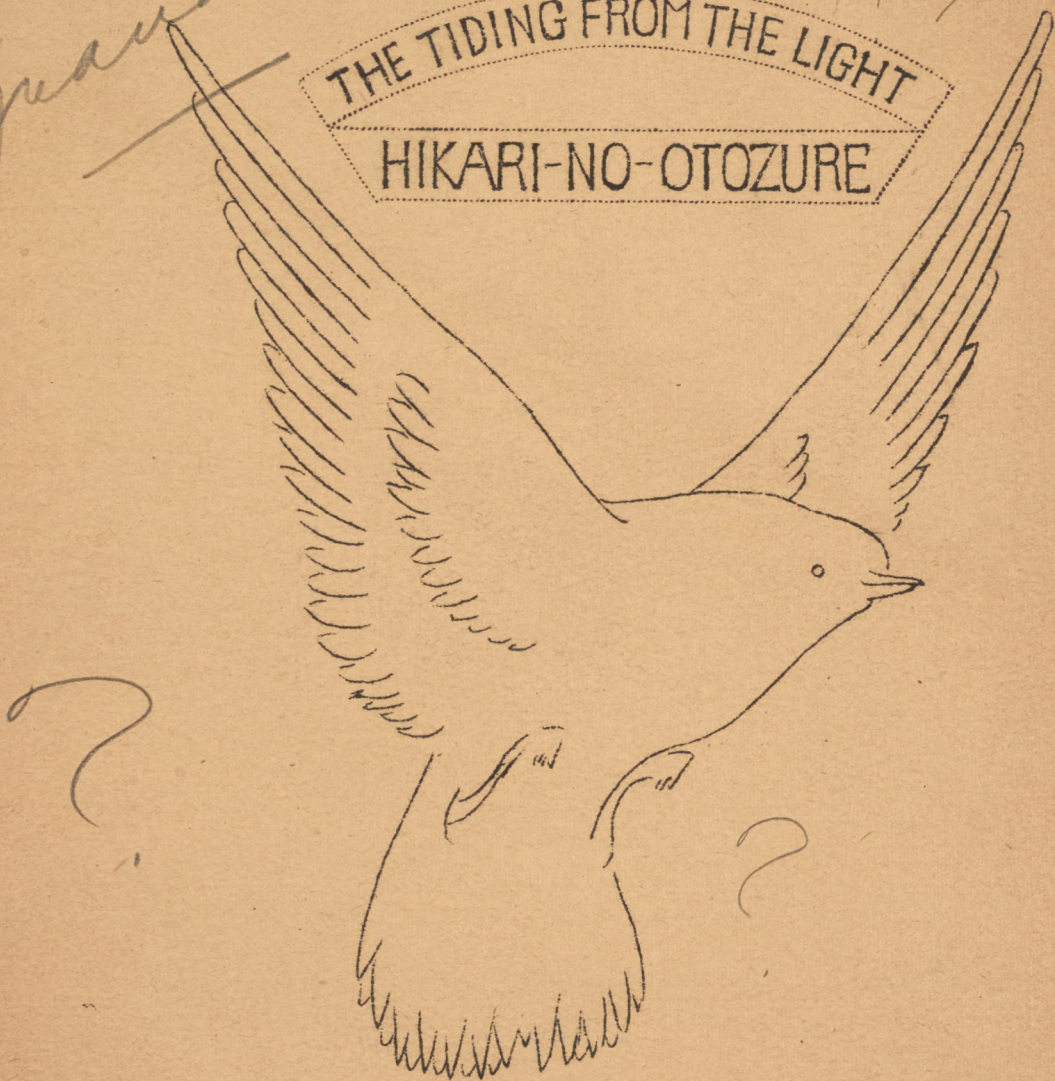
67/14  
C



*Guarade*

THE TIDING FROM THE LIGHT

HIKARI-NO-OTOZURE



AMACHE SEICHO-NO-IYE

{ APRIL 1945 }



## THE HOLY SUTRA

Nectarean Shower of Holy Doctrines  
Masaharu Taniguchi  
MAN II

In the world of reality,  
God and man are one in unison,  
God is the source of Light, and Man is the Light that has  
come of God.

The first erroneous dream is the ancient Theological  
preaching:

Man is made from Dust, and recently, the modern Science's  
teaching:

Man is made from Material flesh, led us to dream the second-  
ary erroneous dream:

Sin, sickness and death do really exist,  
When you have broken away; the fundamental cause of Sin,  
Sickness and Death, shall be reduced to nothingness of  
itself.

People have often recovered from their diseases  
Through mere perusal of the periodical "Seicho-no-Ie" as  
you know,

And this is simply because their primal dreams of mor-  
tal man have been broken down.

When you have no primal dream,

The secondary dream shall follow you no longer;

Thus, when man has none of the dreams,

He, being innocent in himself, could never commit any  
sin, nor could he suffer from any disease; being free  
in himself from all of diseases.

If man had none of these dreams,

Man being immortal in his true nature, could enjoy ev-  
erlasting life.

Therefore, all people on the earth,

Let me tell you: ---

Try and seek after, with the utmost care, your own Real  
Self that is spiritual,

But never seek it in body or matter which are mere pro-



ducts of mortal mind-waves.

Christ has taught us,

"Behold, the Kingdom of God is within you."

Verily, verily I tell you,

Here, "within you" means nothing but "man's real nature or the "real-man".

As the inner-man or man's real nature is nothing but God-Man.

The Kingdom of God shall be found only within yourself!

Those who seek heaven "without" are dreamers who after all never attain heaven.

Those who seek heaven in the material world are sheef

dreamers, and could never find heaven upon this earth.

Christ taught us again,

"My kingdom is not of this world."

The kingdom of the world is nothing but that of phantom;

The land of eternal blessing, shall be found within.

Only when we have come to the realization of the heaven within,

The land of eternal blessing shall be realized again without, as its reflexion,

Only when we have come to the knowledge of the Great Life within,

The Life of Infinite Health shall be realized without, as its reflexion,

Corporeal senses of mortal mind can discern only the "World of Reflexion."

So, when we would have the "World of Reflexion" cleansed,

Beforehand, we must clear the "Originals" within, and keep them free from any dust of Delusions.



# 編輯後記

筆者

軒住所閉鎖令が出て既に四月の陽春に足が掛つた歳月の流れ過ぎ行くは矢の如しとは古哲の金言一時代は急転歩、今日の異変の多き世相からみる時正に鉄砲が否電光としても云ふ可が早や四月号を出版す一面又有難い事である。

時來りて聽又再歸る故山は、マモンドは過ぎ桃も又名残を留めフルム、プラムが盛花を競う頃であり花曇りの空は霞で人心何となく緩漫な時であらう此處巫町は未だ一二度の降雪さへ豫期されてゐる、然し昨今は暖春の氣分、かゝる時人心の古郷を思ふ、又自然と思ふ。

唐津編輯主任が一身上の爲め一時休職され編輯を私に託された、筆者兼職、かゝるると荷が過ぎる驢の如し、諸て責任や重且大いなりである、止むを得、門前の僧果して後陣を承るに相應

いかり。行届かざる思慮、盡せざる事共々々なりと思ふ、此点小輩の故と御宥恕あつて業かを諸賢より御指導と御鞭撻を乞ふ、實相神の子を念いつ、其顯現に順ずのみ。末筆ですが唐津師の御功績を多謝。

本月号は(二月より十日)近で(人生の幸福とは如何なるものか)幸福とは持物に非ず愛であり智慧でありすべてに調和と平衡をとるを教してあり、『無限供結』『靈魂の徳性』『生命とは』『全体であり全機であり』と結すは「他の時間の尊重」「善」「人間の智的偉大さ」等々眞理を体験に現した實例引證をこつて説明されたら満足す、必然実相覺の深りたり。

三月号正誤、脱、左の如し

御神示十行目包みた隠すことな(か)れか脱  
九日一行目内容描成け内眼け(肉眼)正  
二十日十行目(正)かり、ばの字が脱  
二十日十行目(正)苦である(苦でない)正



◎ 消息欄 (第十六回) 順序不同

氏名	現在	住所	氏名	現在	住所
山田覺次	優勝	4-11-B. MC GEHEE, ARK	笹田藤次郎	優勝	936-21-TH STREET, DENVER, COLO.
前川コマ	"	2-5-E. MC GEHEE, ARK	森太次郎	"	2214. EMERSON ST. DENVER, COLO.
原田さち	"	16-9-A. MC GEHEE, ARK	末次龍女	"	41-1-E. TOPAZU, UTAH
推野馬之助	"	22-7-B. RIVERS, ARIZO	新島重平	"	38-8-E. TOPAZU, UTAH
豊田豊三郎	"	24-11-C. RIVERS, ARIZO	小村安治	"	35-2-C. TOPAZU, UTAH
鈴村宇平	"	21-1-C. RIVERS, ARIZO	桃野多三郎	"	14-11-C. TOPAZU, UTAH
吉本友之進	"	226-12-B. POSTON, ARIZO	前田朝悟	"	10-12-C. TOPAZU, UTAH
海野富之助	"	222-9-D. POSTON, ARIZO	江又秀次	"	28-1-F. HERT. MT. WYO.
加茂作太夫	"	227-7-D. POSTON, ARIZO	廣川づじ	"	2-15-E. HERT. MT. WYO.
丹原タケノ	"	308-14-D. POSTON, ARIZO	平原元吉	"	21-19-F. HERT. MT. WYO.
川口タケノ	"	308-13-D. POSTON, ARIZO	東嘉重	"	12-2-B. HERT. MT. WYO.
岡村タキ	"	308-8-D. POSTON, ARIZO	早川カメノ	"	2-17-A. HERT. MT. WYO.
田中三郎	"	44-3-C. POSTON, ARIZO	高本つる子	"	49-3-A. RIVERS, ARIZO
立石節丈	"	44-7-D. POSTON, ARIZO	田草川とよ子	"	54-11-A. RIVERS, ARIZO
山内栄太郎	"	44-12-A. POSTON, ARIZO	坂梨健三	"	40-5-B. RIVERS, ARIZO
吉田栄藏	"	53-6-C. POSTON, ARIZO	長谷三しの	"	61-9-D. RIVERS, ARIZO
北川慶次郎	"	9H-6-C. AMACHE, COLO.	團野留作	"	30-12-C. RIVERS, ARIZO
伊藤タケ	"	9K-11-C. AMACHE, COLO.	重中信次	"	49-12-A. RIVERS, ARIZO
塩津喜兵衛	"	11F-4-D. AMACHE, COLO.	松本美春	"	5312-B. TULULAKE, CALIF.
横井サカヨ	"	7K-11-F. AMACHE, COLO.	廣瀬定平	"	4614-D. TULULAKE, CALIF.

(10H. 7-E. AMACHE. COLO.) 本誌

発行所

(10E. 5-B. AMACHE. COLO.) 本誌編輯 北田



◎ 生きた生命

(生長の家の歌より)

名乗れ、境遇に屈従する卑怯者は誰だ。

誰かわが生命を食べ物でこねあげた塊だと思つてゐるのだ。

生命は蠟細工ではないぞ。

石膏細工ではないんだぞ。

おれは旋風だ、颶風だ。渦巻だ。

おれは環境を、徐々にわが望みのまゝに、

飴のやうに、捻ぢまげる。

俺は宇宙を造つた大いなる力と一つの者だ。

おれは空中電氣を雷に変じ、

太陽の光を七色の虹に変じ

眞黒な土から燃えるやうな赤い花を咲かし、

火山を爆発さし、あの不思議な星雲から、

太陽系を生んだところの大いなる力と一つの者だ。

環境か何だ、運命か何だ、

おれは、おれの好きな時が来れば、

鯉が石垣の間から脱け出すやうに、

どんな苦しい運命からでも脱け出すのだ。

X

X

X

X

X



お産も無事にすんで大部屋に連れて来られると、急に空腹を感じてトースト  
二枚と水をカッパに貰ひとてもお美味く頂き、尚ほまだ何か欲しかつたがそ  
れ丈で辛抱して置いたそうです。茲（ツルレーキ）の産科主任の白人医師が習朝  
見廻りに来て（昨夜産前一度診察して貰つたそうですが）どうだつたか「魔藥を嗅  
せて貰つたか」と問はれたそうです。この主任も難産を予想して居たりしかつた様子  
それば此所で魔藥は普通の時には使用せぬのだそうです。この様な危険な早期  
破水と逆兒を無痛分娩させて頂き、二人目だつたのに後腹も痛まなかつた、と  
云ふのはこれ偏に谷口先生の尊いみ教へにあると同時に私達の先祖諸靈様及  
び守護神様のお加護、どつた事並に生長の家諸先生方のお指導のお賜、と大  
変感謝致してゐる次第であります。そして逆兒と現はれ、早期破水と現は  
れて示されたる私共、心の間違ひ、これでよいと自惚れてゐた自我を、形  
に現はして悟らせて頂いて、これも又大変有難いことでした、未だまだ修業  
はこれからだ、一生の修業だ。自覺だと。心新にして深く感謝してゐる次  
弟であります。今後宜しく御願ひ致します。誠に有難う御座りました。

（ツルレーキ第二十七区誌友會にて。一九四四、十二月 発表）

附記。當垂町センターに於いても上掲の松本御夫妻鶴嶺湖移動前同づら  
に居住の誌友○本夫人長女出産の時逆兒なりしも易々と出産し。今回又二女  
無痛分娩す。又K氏の長女は骨盤狭少のため三医師合議の上開腹手術の用意  
中に父母神想觀を行ひ光明思念せしに、己ヨリと生れた例があります。



ドクターに（中村トクター）いきみたいと云ふと「それではつらいにいきんで御覽」と云ふので「ついきんだそうです。それでいよく本調子だと云ふので早速デリバリルームに連れて行つて貰ふとドクターが手袋をはめるや否や、サツト生れたそうです。その前に別室で待つてゐる間に看護婦達が稽古に聴診器で腹を調べに来ては首を傾げて向ふに行くすると少し古参のが代つて来て、診ては又首をひわつて向ふへ行く今度はドクターが来て調べつうーと太い息を吐いて考へ込むものですから、何所か調子が悪いのか知ら、と思つてふ々不安になつて来たそうです。既に水が出て了つてゐるのですから、方々で鼓動が聞えてゐる上に（家内は其時知りなかつたが）逆児でしたものですから、ドクターもこれは危険と思つて居たそうです。所が「知らぬが佛」の家内は一心になつて痛みはない。痛みはない。お産は病氣ではないのだから痛みはないと念じ續けて居つたさうです。神の子が神の子を産むのだから痛みはない。必ず無痛安産である。とその時痛みのやうなものも只お腹で虫か走る様をコシヨ、と一を感じが間を置いてしてゐたそうです。そして余り安々と産れたものですからトクターも二人の看護婦も（丁度その時は十二時）交替の時で白人の看護婦が二人居つたのかつを揃へてこんなイエーじなのは初めてだと、余り感心するものですから「以前のこともんなに軽かつた」と云ふと「以前にもこんな風の逆児だったのか」と云はれたものですから、そこで初めて家内は逆児だった事を知り吃驚したそうです。



いっそうたいけんしゅう  
◎ 實相体験集（第十話）「保管番号三十号」

カリフォルニア州ツールレーキ隔離キャンプ八五三日

松本義雄

私が生長の家のみ教へにふれてから末だ僅か二年余りヒイかなりませんのに、その近い間に数多くのお蔭を頂いて居ります、たとへば眉間の皺が一遍に伸びたとか、家庭光明化、持病の頭痛が無くなつたとか、澤山あるのですが今晚は家内の無痛分娩に就いて話させて頂きます。私の家内は入所以前からの詠友で矢張り多くの有難い体験を持つてゐるので御座ります。

一千九百四十二年十一月（ロンド州）亜町転住所内病院で長男を産んだ時も産む無痛でありました。その時は痛みは少しあつたさうですが「生命の實相」その他の単行本にのつてゐる無痛分娩の体験談に比べてとても軽いから私達ママは無痛分娩と言つて居りました。そして此の度は去る十月十二日に次男を授つたのですが、其の時の様子を少し詳しく申し上げます、十一日の朝から痛みは少しも無いのに、今日はどうも生まれそうだと云つて居つた所が晝からの三時頃に早期破水がありましたので早速入院しました。そして晩の十一時頃にやつと痛みの様な、痛みではないのですが知らせが来たさうです。それ迄入院してから４ヨリ、看護婦が来ては痛むか／＼かと聞に來るのですが、どうもないものだから痛みが來と申譯が無い様な叱られそを氣がして、氣が氣でなかつたさうです。そうしてゐる内に自然にいきみたくなつたさうです（谷口先生はいきみは自然にくると書いておられら由）それで、



四月二十六日

物質無と知る日

自分が働かないでゐて、先祖から譲られた財産で、自分の名譽らしく、自分は富豪だと思つてゐる人があるが、それは決して自分の名譽でもなんでもないのである。畫師が若し自分の父が繪を上手に描いたからとて、遺産に澤山の立派な繪を遺して行つたからとて、父の描いたその繪の父の署名を消してしまつて「おれはこのやうに繪が上手だ」と云つたり、それけ著作の侵害であり、剽竊であると云つて非難されるであらう。財産は譲り渡されても、譲受けた人に名義を換へても剽切にも浸害にもならないのは、財産と云ふものは、所有品であつて、その人の人格と何らつながらの無い外的物件に過ぎないからである。著作や、繪畫が、假令作者が名前をかへてもよいと許しても、自分の著作しないものを著作だとして発表したり侵害とか剽切とかの問題が起るのは、それが單なる外的な所有では人格とのつながりを持つてゐないからである。名義を書き換へ直ぐ自分のもので無くなるやうなものは始めから自分のものでなかつたのである。本當に自分のものは、幾ら他人の名前に書き換へても依然として自分のものであるし、又他人から金錢のやうに譲り受ける事は出来ない。若し吾々が他人に譲り渡したり、名義の書換の出来るもので誇らしく思はうとしてゐるならは、それは自分のものでないものに對して自分が誇らうとしてゐることになるのである。肉体が死んでも、壊れないものだけが眞にその人のものであり、また眞に誇つても好いものである。



四月二十五日 人に必ず深切出来る日

だゝ魂の徳性のみが、現実界から靈界の境を超えて、吾々にとつて永存する  
實なのである。徳性の第一は宇宙の眞理と、生命の眞理とに就ての悟りである。  
魂そのものが磨かれて内在の光が宇宙の眞理を照輝かす状態になつたことであ  
る。徳性の第二は、自分の磨かれたその魂が愛のつやふさんで拭はれて温い光  
を輝かせてゐることである。智慧の悟のみで輝いてゐる魂の光は冷いけれども、  
それに愛の輝きが加はつたものは、その冷たい光の上に、えも云はれぬ温い柔か  
い光が漂ひ、白玉の上をふらふわりと砂で蔽つたやうな柔かさを有つてゐる。智慧  
と悟りの光りは宇宙の眞理を瞑想すると云ふ哲學的行によつて得られる。  
併し愛の光は、決して智慧のみで「自分は愛深い」と考へるだけで出来て来る  
ものではない。それは掘出して鑑定さへ間違はなければ寶石は寶石として價  
値はあるけれども、さてその實際の輝きは、「此の寶石は光つてゐる」と考へ  
るだけでは輝いて来ないと同じである。哲學し思索すると云ふことは「生命  
の寶石」を掘り出して来ることである。これを實際に琢磨して、温かい柔い  
何とも云へない輝きを出さしめるのは、愛行にある。愛は心の中で空想して  
ゐても何にもならない。それは實行にあるのである。實行し、實行し、實行  
したとき、愛の價值も、愛のよろこびも判るのである。愛とは自分を捨て切  
つて、相手の中へ没入することである。愛してもまだ不平があるのは没入の  
仕方が足りないで、何かまだ自分に求めるところがあるからである。



四月三十日 全即一を自覺する日

生命と云ふものは一つの全体である。橋田文相の謂はれる全機である。全体と云ふと、部分品の総合全体と云ふやうに思ひ、全機と謂ふと、各機官の機能の総合のやうに思ふ人もあるらしいが、全体と云ふ全機と云ふのはそのやうに「部分」を先づありと考へて、「部分」を寄せ集め式に総合するのではないのである。例へば此處に一個の「人間」があるとするとするならば、この人間には「肉体」と「精神」とがある。だから今迄でのやうに「肉体」方面からのみ、物質方面からのみ治療するのは「生命の全機」を取扱ふものではないからと云ふので、人間は「精神」方面から治療しなければならぬ、斯人間を「肉体」方面からと、「精神方面」からと両面から扱ふのとぞ、人間を「全機」として取扱ふのだと謂ふやうな主張が若しありとするとするならばそれは「寄せ集め」を「総合」と思ひ違ひしてゐる愚論である。人間を「全機」として取扱ふのは、人間を精神部分と肉体部分と両面から寄せ集めて取扱ふのではなく「人間」を生命として、全体一つなるものとして取扱ふのである。「生命」は肉体でもなければ精神でもない、「生命」の全機が肉体面と精神とへ現象してゐるに過ぎないのである。「生命の實相」を読んで病氣の消える事實を精神力による病氣の克服だと思ふと間違である。さう云ふ精神面は「心も無い」の一語で否定されて了つてゐるのである。

自覺による生命の全機の発現こそ病氣を消す力である。



# 四月二十九日 幸のみ来る日

一切の不幸災難を業の自浄作用とせよ、病氣の場合には生命の自家平衡作用だと云ふ、従容として心を乱さず、更に進んでは「有り難うございます」として感謝して受けるやうにする生長の家の生き方は、ギリシヤ、のストア派の哲學者の生き方に似てゐるけれども、生長の家がストア派の哲學者と根本的に異なることは「不幸災難病氣本來無し」と観じてゐることであつて、不幸災難病氣と云ふ敵手に儼然として抗してゐるから偉大であるといふ力みが一切ないことである。不幸災難病氣が出て來たりそれを「有る」として正面衝突して、それを克服したのはストア派の哲學者であつたが、吾々の前に若し不幸災難病氣等があらはれれば、吾々はそれがあるとして正面衝突しないのみならず、そんなものは「吾が過去の想念の影」とみとめて、その客觀的現實性の根據を剝奪してしまふ「それでもう業が消えた」と心の世界で、火を吹き消すやうに、消て了ふのである。尤も「不幸災難病氣等があらはれなければ業は消えないのだから、不幸災難病氣等があらはれて欲しいのだ。またあらはれる方が塊の浄めになつて可いのだ」と思ふやうになれば、それはキリスト教的な受難禮讃になつて、本當の生長の家の考へ方になつて來るのである。吾々は不幸災難病氣等を有るとして取扱はないし、また他の世界でその存在を認めないし、生命の強化や淨化のための必需物とも取扱はないから、此の唯心の所現の世界に不幸災難病氣をつくらなくなるのである。



四月二十八日 全てに打勝つ日

不幸や災難と見えるやうなことは、不幸や災難を喜ぶことによつて起つて来る。ストア哲學は、不幸や災難に面して、波濤に抗する巖の如き毅然たる態度で受けることを教へるけれども、心の力を強調するその哲學の半面は唯心論であり、外界の不幸や災難を、自分の外物だとして、唯耐へることによつてのみ、それを無力と同様ならしめることだけを教へた點に於て唯物論である。それ故にその不幸や災難は精神力によつて克服さるべきものだけれども、それだけ依然として客觀的存在である。喩へば彼等の教へたところの不幸災難は「組伏せられたる敵」のやうな存在である。ひとたびこちらの組み伏せられる力が弱つて來たとすにば、猛然として反撃してくるであらうことが豫想されてくるところの「不幸災難」なのである。そして此のストア派の哲學では自分の心の力を發揮するためには、恰度、カスが角力の相手がなければ自分の力の強さを示すことが出來ないから角力の敵手が必要とすると同様じ、人間の心の克己性の強さを示して己を強者として体験するためには、自分の克己力と闘ふところの敵手としての「不幸災難」を必要とするのである。その哲學は單に不幸災難の客觀性を認めるのみにとまりず、自己の強さを表現するためには「不幸災難」を必要とすることと繪師がカンブスを必要とするが如くであるから、この派の哲人は概ね不幸と災難に會ひ、メクラテスに如く、セネカの如く從容として動ぜずに、その不幸災難の中に魂の勝利を高唱しつゝ死んだのである。



## 四月二十七日 そのまゝ有難く受ける日

そのまゝ、素直に受けるのが幸福の道である。吾々の外界に起らうとしてゐる事物は、それが起るべき理由があつて起りつゝあるのであり、それはその人の周囲に於て起る以上、その外觀が如何に恐しく見えるのであるにしても、必ず其の人にとつてよきものであるからこそ起らうとしつゝあるのである。吾々は事件の外觀に驚いたり恐怖したりして逃げ出さうと考へてはならないのである。吾々は恐れずに、その起りつゝある事物を諦視して、何故このやうな事物が起るのであるか。その内的意義を探つて見るべきである。それを探ることによつて次の不幸を未然に防ぎ止めることが出来るやうになるであらう。大抵の不幸はそれは不幸でなくして、生命の自淨作用なのである。低氣壓高氣壓の變化によつて恐しく見える大旋風が起つたとしても、それは眼に見えない氣壓の世界の不平衡を平均せしめるための、自家平衡運動に過ぎないのである。海原に大きな波濤が起つて船が覆りさうになるのも、海の水自身にとつては波濤は自家平衡運動であつて、その運動その儘の中に救ひがあるのである。吾々の身体に熱が出たり、下痢したり、食慾がなくなつたり、発疹したり、痰咳が出たりするものも、生命の自家平衡運動なのである。生命は、熱や、下痢や、暫時の食慾の欠乏や、発疹などによつて体内の異常成分を平衡し、淨化するのである。その状態は恐るべきものゝやうに見えても、何でもそのまゝの中に救ひがあるのだから、これを恐れず有り難く受けるとき解放が来るのである。



四月二十四日

歡喜法悦の日

他（た）が儲（もろ）けたことを自分（自分）が損（とん）したかの如（ごと）く羨（うらや）む人間（じんげん）はいつまでも自分（自分）は幸福（かうふく）になれるものでない。人生（じんせい）の不（ふ）幸（かう）の感（かん）じの大部分（だいぶん）は嫉妬心（うととしん）や羨望心（せんぼうしん）から来るのである。いふんのもちもちの持物（けうぶつ）の方が優（すぐ）れてゐると云ふ理由（りゆう）で不快（ふかい）になる人（ひと）は、常に人の持物（もちぶつ）のことを氣（き）にかけてゐなければならぬのである。此（こ）の短（みだ）かい地上（ちじやうせん）の存在（ざん）期間（きかん）に於（お）て、吾々（われら）は他の持物（もちぶつ）のことなどを氣（き）にかけてゐるやうなことで、自分の魂（たまし）の進歩（しんぽ）について氣（き）に掛けてゐる時間（じかん）がなくならぬであらう。そして、魂（たまし）は強（きやう）ど何等進歩（かうとうしんぽ）しないで、従（したが）つてその魂（たまし）は地上（ちじやうせん）に出現（しゅげん）した使命（しめい）を何等果（かうとう）すこととなくして、靈界（れいかい）へ行（い）くときが来るであらう。現實界（げんじつかい）と靈界（れいかい）との境界（さかい）を超（こ）えるとき、吾々（われら）はそのやうに執着（しやくちやく）し、氣（き）にかけてゐた外的所有物（がくがいしやうぶつ）をば、何一つ持（も）つて行くことが出来ないことを発見（はっけん）して驚（おどろ）く。そして魂（たまし）を装（ま）ふ「徳性（とくせい）」と云ふ着物（きもの）が何もないことを発見（はっけん）して、羞（はづ）しくて靈界（れいかい）の入口（いりぐち）で佇（たち）み、躊躇（ちうちよ）して靈界（れいかい）の中（なか）へ進（すす）むことが出来ない。所謂（いわや）六道（だうだう）の衢（みち）で迷（まよ）ふのである。吾々（われら）は「浮（う）べない靈（れい）」になつたり「六道（だうだう）の衢（みち）で迷（まよ）ふ靈（れい）」になつたりしない爲（ため）には、靈界（れいかい）へ行（い）くとき持（も）つて行くところの「本當（ほんとう）の富（とみ）」を造（つく）つて置くべきである。吾官（ごくわん）に見（み）える「形（かたち）あるもの」は本當（ほんとう）の実在（じつざい）ではないから、又「本當（ほんとう）」の富（とみ）でもない。誰（だれ）でも十年（じふねん）したる無價（むげ）値（ち）になつてしまふ株券（かぶせん）ならむつと永く價値（かち）を増（ま）す株券（かぶせん）と買替（かひか）へて置きたく思（おも）ふであらう。ところがすべての有形（けいけい）の富（とみ）は幾十年（いくねん）か後（のち）にはその人（ひと）にとつて無價値（むげち）になつてしまふニヒモノの富（とみ）なのである。



四月二十二日

心愉しき日

人間を不幸に突落すものは、不幸と見えるその事物ではなく、『それは不幸である』と考へるその考へである。不幸とか幸福とか云ふことは皆心にある。或る人は一十萬圓持つてゐたが、そのうちの五百萬圓を物の値下りで損をしたとき、『財産の半分も減つた』と思つて大変な不幸に際會したと思ふかも知れぬが、十圓しか貯金のない人が貯蓄債券を買つて十圓の割増金が當つたり、大変な幸福にありついたりと思ふであらう。甲は尙五百萬圓を持ちながら不幸に感じてゐるし、乙は十圓しかないのに幸福感を感じてゐるのである。幸福感と云ふものは決して『物』や『財貨』の多いことによるものではないことを知ることが出来るであらう。英雄豪傑と云ふものは世界を支配する者のことではなく、自分の心を支配するもののことである。『物』や『財貨』は勿論肉體の健不健さへも、自分の幸福感を打ち破ることが出来ないことを知つて、毅然として、物や財貨の増減や肉體の健不健さへも自分の幸福感を有つてける者が英雄豪傑である。『外にある事物』は何一つ吾々の心を害するところが出来ないけれども、心がひとたび『外にある事物』に絡みつくと否や、心はその外物で始めにも掉り廻され始める。その『掉り廻され』が起るうけ『外にある事物』を自分とは獨立した外物であると思つてゐる結果である。外にあるやうに見える事物は皆自分の心の投影であるとき、自分の心を調節することによつて外界を支配することが出来るのである。



四月二十二日 眞の無限供給を知る日

偉大なる神の子たる人間は、自分が『神の子』であることと云ふことを概念で知るだけでは價值がないのである。論語讀みの論語知らずのやうになつてゐるつてはならないのである。どんな運命でも脚下を踏みしめて、毅然として笑得るやうでなければならぬのである。安價な、努力なしの『無限供給』など云ふ概念に自己陶醉して、自分を磨くことを怠つてはならないのである。『無限供給』とは必ずしもあらゆる物が豊富にあまつて、人が貪しくとも、自分だけが享樂してゐると云ふやうな利己主義、自己満足的なものでない。そのやうな『無限供給』は他の貪しさと比較してみても自分の豊富に快感を感じてゐる利己主義な餓鬼道の一変形に過ぎない。本當に無限供給の眞理を体得した神の子は既に自分自身の此の身体が物質身に非ずして如意寶珠身であることを知るが故に、自分が貪つて、その貪りの成就のことを『無限供給』などと云ひけしめないものである。本當の無限供給は、『無限供給』などと考へなくなることである。琵琶湖はみずから『無限供給』などと考へずして、吾々に常に豊かな良水を供給してくれるのである。太陽はみづから『無限供給』などと考へずして吾々に常に豊かな溫熱と光線とを供給してゐる。『無限供給』とは貰ふことを考へずして常に無限に與へてゐる人のことである。貰ふこと、恵まれることばかり考へて『無限供給』だと云つてゐる人は何時かは躓くときが来るのである。『何物をも足らずとしない』自覺が神の子である。



四月二十日 こちりから優しい語をかける日

人間の智的偉大さは、あらゆる場合に於て、『斯うあつて欲しい』『愛されたい』『同情されたい』『やさしい言葉をかけて欲しい』と云ふ自己中心的な一方な要求を除き去つて、もつと相手のことを思つてあげて『斯うしてあげたい』『愛してあげたい』『同情してあげたい』『やさしい言葉をかけてあげたい』と云ふやうにするのである。相手が『優しい言葉』をかけてくれなかつたり、それに就て不平を言ふ勿れ、まづ自分から相手に優しい言葉をかけてあげることにすればよいのである。立ち對ふ人の心は、自分の心の鏡であるから、自分の方が相手がやさしい言葉をかけてくれない』と不平を言つてゐるときには、相手も同じ思ひである。ところが愛されたい時には、先づ愛するのである。向うが愛するから愛するのではない。向うがこちらを磔に掛けてもなほ人類を愛しつゝいたギリストのやうに愛するのである。その時に人類は初めてギリストを愛し始めたのである。自分かそれほどに相手を愛してゐないで『相手が自分を愛してくれない』と不平を云ふのは、自分の方は與へないでゐながら、相手が與へられようと云ふ卑怯な利己主義だと云はなければならぬ。同情されたい人は先づ相手に同情しなければならぬ。同情するとは相手の身になり、相手の心になつて考へてやることである。自分自身が一度も相手の身になり、相手の心になつて考へてやることをしないでゐなから、『あの人は私に同情しない』などと考へるのには自分の與へない代償を相手から求めるものだ。



四月二十日 他を救す日

若しあなたか、人から奪つた時間の数が、どれだけ多いものであるかを計算  
することが出来るならば、自分は世界一のどんな泥棒よりも、人の最も尊いも  
のであるその生命を、奪つてゐて申譯がありまじやうとしたと慟哭するであら  
う。どう云ふ人にとつては奪つた時間を計算する機械がないのでせめてもの幸ひ  
なのである。若ハハキリと人々から奪つた時間を計算することが出来たならば、  
たゞそれだけでもその人は償つても償ひ切れぬい悪徳の奴隷となつてゐたことを  
知つて戦慄するであらう。一人の人生に疲れてゐる人が私に助言を求めて來た場  
合に、私がそれに會ふことが出来なかつたからとて又私に贅澤にも愛されるこ  
とを求めて來た其の人に會ないからとて、私は必ずしも冷淡なのではない。私は  
書齋の中で執筆をするとき云ふことによつて、もつと多くの讀者一時に會つて  
ゐるのである。人間は、もつとその觀察が廣くなり、利己的なところが失くな  
ることが必要である。面會を求める人は、自分のその「面會」とか、自分の「  
相談」とか云ふことのみを心の中に考へてゐるが、相手が、どんなに多忙で  
あるか、相手が今自分が面會して相談したいと思つてゐる「事柄」よりもいく  
十部も尊い仕事に従事してゐるか云ふことを考へてやるべきである。人を  
恨んだり憎んだり誤解をしたりしなくなるためには人間は自分の心から自分  
の「したい」を除き去り、「自分」のことを考へると同じやうに、「相手」のこ  
とも考へてやらなければならぬ。



## 四月十九日 地上は魂の向上のためと知る日

吾々が地上に生れて来たのは、地上に於て實現し得る限りの魂の向上を得るために生れて来たのである。吾々はそのために限られた時間しか有つてゐないのである。そして何人も此の肉体の生命がやがて終るべきことを知つてゐるのである。それを知らない者は一人もない。一時間でも浪費したためとに殘る時間が一時間だけ少なくなつてゐるのである。これは明かなことである。吾々は時々刻々地上の生命の死に近づきつゝあることを認識すべきである。吾々は生命の實相の生き通しを説くけれども、そのためにとて地上の生命が有限であることをわすれてはならない。この地上の生命は「今」と云ふ刻々瞬々に「永遠」とつなかりながら無限大の價値をもつて流れてゐるのである。「永遠の生命」と云ふものが何處かに別にあつて、それとは離れたところの別の價値少い「地上の生命」があるのではない。吾々が「地上の生命」として顯現してゐる以上は「地上生命」の刻々瞬々が「今」このまゝ「無限の生命」なのである。今を無視して無限の生命などは有り得ない。「今」を大切にするほかに永遠の生命を生きたる道はないのである。「今」われらの尊い時間を一分間でも、私的目的のために浪費せよと強制する權利は誰だつてない。「訪問する人」は訪問した事柄のほかに、より大切な相手方の「時間」のことを考へてやるやうにしなければならぬ。その訪問したことが金錢のことならば、その人は何と云ふ詰らないことのために、相手方の尊いものを奪はうとするのであらうか。



四月十八日

他人の時間を尊重する日

人間はもつと他の人の時間と云ふものを大切にしてやりななければならない。どうかすると人間は金銭よりも時間の方を大切に考へてゐるらしいことがある。金銭を無暗に強請に来る人々は減多にないし、そんなことをすることは非常な悪徳だと考へられてゐる。併し他人の時間を強請することは何等悪徳でないかの如く、當然の權利であるかの如く考へてゐる人々が随分多いのである。これは確かに唯物論の殘渣が人間に殘つてゐる證據である。金銭と時間と、それを並べて見たらどちらが尊いのであるか。金銭は失つてもまた得ること、出來るか、時間は失つたら再び歸らない。私しの何十何歳の何月何日の何時間、矢つたり、もうその時間は永久に歸つては來はしないのである。さう云ふ尊い時間を無駄なことに平氣で人に與へるのは、それが極めて尊い仕事のためでない限りは、非常な浪費だと云はなければならぬのである。優して私のやうに、一分間と雖も公な仕事につかつてゐて時間の足りない人間には、私的、目的のために時間を使ふことは公なものに浪費することになるのである。それもその人が自分の時間を自身が進んで私的、目的に使ふ場合は、それはその人自身の勝手に許される處置である。と云ひ得るかも知れぬが、さうでなしにたゞ自分の自己目的から、人を勝手な時間に訪問して、その人が會はなかつたからと云つて、その人が愛が少いなどと批評者自身が相手の時間に對してどの位「愛がない」かを反映してゐるに過ぎないのである。



## 四月十七日 小きき時代の幸福を偲ぶ日

會社に出勤しながら毎月「生長の家」誌一冊を執筆してゐた時代には、訪問者にも會ひ、みづから手紙に執筆し、病人に直接に按手神思想觀もしたものである。それどころか訪問者にいちく茶菓を出したものである。臺灣製糖大阪支店長のお野朝次郎翁がお菓子を食べて糖尿病が治つたのもその頃のことであつた。その頃でも常人の三倍位は働いたのであるけれども、今は五種の雜誌に一々執筆し、講習會で毎月一週間は消え、書信も殖え、その頃には感謝の手紙ばかりであつたが、此の頃では面會謝絶で恨みの手紙や、株式會社光明思想普及會へ送金したのにまだ送本不着ぢや、どうしたかと云ふ様な詰問の手紙まで来る。官廳との折衝の報告なども時代が時代だけに可成ある。それに肖像寫眞への署名や、講師試験の考査や、地方事情の陳情に對する複雑な問題を色々考へてゐると、執筆は遅れて来るしインスピレーションの渡長が合はない。もう少しジツと靜かにさせて置いて欲しい。朝から晩まで私は休む暇を有たぬ。應答が簡單になる。なるべく人に會はなくなる。これは生長の家と云ふものが急に大きくなつたために、私の助手として働いて下さる人々が充分には足りないからである。そのやうな事情も察して、私が面會謝絶をしたり、簡單に物を云つたりしても赦して頂きたい。私にみとめられたいと思ふ人は、そのやうな考へを捨て、神にみとめられたい考へになつて頂きたいのである。私は「生長の家」なる教化理念に奉仕する一人の執筆職工に過ぎないのである。



## 四月十六日 皆にお詫びする日

私は本部の講師や各役員、普及會の社員たちに對して極く冷淡にしてゐるやうに見られる事があり勝である。講師が地方へ長らく講演旅行に往つて來て歸つて來ても、そして私の宅へわざわざ訪ねて來ても、お目に掛れないで「唯今執筆中」だけで玄關から歸つて頂くことが多い。まことに申譯ないけれども、これは私の仕事か机の上に山積して、若し執筆中に人が入つて來たために、その執筆を中断されるならば、インスピレーションの絲は断たれて了ひ、また元のインスピレーションを喚び出すのに數時間苦しまねばならぬからである。そして、一日三人の訪問者があつて私のインスピレーションを中斷してしまふならば、私は波長を遠距離放送に合はさうとして合はし兼たラゲオ、セリトの様に、あせりながら空中放電のいらいしい音を心に聴くばかりで執筆が進まない。私は文學界の有名な創作作家が山の中の温泉宿や、どこかの閑靜なホテルへ執筆に出掛けるといふ話をよく聞く。私は毎朝間違ひなく本部の道場へ出席して講義しなればならぬので、さう云ふ閑靜なホテルへ行くことは出来ない、也めて自宅で靜かに瞑想し、靜かに不純でないインスピレーションを受けて執筆したいと思ふのだけれども、訪問者相接ぐのである。斷つて歸つて頂くとその翌日位に「俺の着物が身窄らしいから會はないのだらう。俺はお前を見損なつた」と云ふ様な悪罵が來る。さう云ふ手紙を見ると私の心は病むのだ。折角純情な氣持のインスピレーションが又逃げて行く。唯合掌されるばかりである。



四月十五日 善にも捉はれぬ 日

「善とけ」こんなものだ、自分の理想を描いてゐる善人ほど極みにくいものはない。自分の理想の型に當て嵌らないものをすべて「悪」だとか冷淡だとか見て行くのである。さう云ふ人たちにだけ周囲は悉く冷淡な人に見え、周囲は悉く悪人の集合のやうに見えるのである。さう云ふ善人は自分を善人であると思つてゐるが故に、自分の批判が正しいものだと思ひ込んでをり、その批判を改めしめることが甚だ困難なものである。さう云ふ善人は周囲に「悪」と「冷淡」とのみの存在をみとめるから、周囲は混乱してしまつて調和と云ふものが得られなくなる。親鸞聖人が「善人なほもて救はる、況んや悪人をや」と云つたのは此處のことでもある。かう云ふ善人の特徴は人に愛されたいと云ふことである。自分が相手を愛しておけるのではなく、内うは善人だから愛してくれる筈のものと自分勝手に考へてゐるのである。そして愛してくれる筈だと考へるところの「愛」の内容も、自分で考へた依手勝手な「愛」の内容なのであつて、自分の豫想したものではない愛がやつて來たり、この人は愛してゐてくれないのだと不平に感じたり、恨みに感じたりする。このやうな先入觀念を捨てることが悟りである。私は生長の家の誌友のところへ修養に行きたいと云ふやうな女中さんを頼まれても、悉くお断りすることにしてゐる。さう云ふ申込者は、心根は殊勝であるが「修養」と云ふ先入觀念を抱いてやつて來さうしてその觀念に當嵌らない主人を批難し始めるに極つてゐるからである。



四月十四日 脚下を忘れぬ日

人間は形に於てはあまり高く伸びるものではない。形の丈が高くなりすぎるとき、重心が上になり過ぎるとき、少々釣合がとれないだけでも、顛倒してしまふやうになるのである。吾々は心の中に伸びるもの』を蓄へて置いて、形は地下を水のやうに潜めてゐることを學ばなければならぬ。人間は自分の事業が旨く行くと、すぐ慢心をして、形の世界でも伸び上らうと、贅澤になつたり、威張つて見たり、自分の地位を笠にして周圍人に權柄づくになつて見たりすることがあり勝である。大抵出世した者が途中で覆つるのは斯うして自分の重心が上へあがつてしまふからである。重心は何處までも下になければならない。自分が世間から高く押し上げられるほど、自分の重心を下におとし、自分の眼は謙つて下を向いてゐなければならぬ。私は諸方から講習会や講演会に来てくれと云はれるが、今は己むを得ないから、講習会で話したり、講演会で喋つたりしてゐるが、これは自分の重心を高く置くことになるのである。賢明なる者はかうした高座から出来るだけ早く身を引くのに限るのである。これは『生長の家』と云ふ團體を大きくするためならば、私はいつでも身を引くのである。而るに事は公けの問題である。多くの人が私の執筆や講習で救はれつゝある。その救はれつゝある人々を無視して、自分は謙遜』だと云ふ矜りを満足せしめるために地下へ潜れてゐることは出来ぬ。私は止むを得ず、高座に出たり、原稿を書いたりしてゐるのである。



四月十三日 夫婦互に眞に并めてゐるが反省する日

吾々は必ずしも日本の人口を殖やさうと云ふ國策線に沿はうと云ふ理由で眞理を枉げて人工流産を廢めよと云つてゐるのではない。吾々は常に眞理を説いてゐるのであるが、それが偶々國策線になつただけである。眞理は一時抑へられたいやうに見えても、それは不滅のものであるからまた輝くときが来る。眞理に反つて、殺すべからざる胎中の生命を殺して見て、紙幣束と云ふ紙切を貰つて見ても何にも得られない。親が結核病に罹つてゐたからとて、それから生れた子供が必ずしも虚弱體質と云ふことはないのである。メンデルの遺傳の法則が示すやうに、健康なる祖先の遺傳因子は埋もれてゐてその健康體質が次に生れる子供に發生するかも知れない。現在の虚弱なる親が、若しかしたら一層虚弱になるかも知れない（而もこれも確説ではない、妊娠した結果、自己療能力が旺盛になつて一層健康化した母親は世間にザラにある）と云ふ理由で胎内の小供を殺しても好いと云ふ理由は見つかからないのである。市井傳ふところによれば、この頃人口増加の國策に逆ふことは出来ないといふので人工流産手術をやらない代りに、医者の方では、子供を欲しいと云ふ婦人に無暗に「子宮後屈」であると診断してその施術料を得ようとする者がある由である。吾々は法律上医療を阻止することは出来ないから医療に反對はせぬ。爰に助言したいのは、眞に後屈してゐるかどうかと云ふ事を、或るべく施術料が私収入にならない処の官公立の専門医に診断して貰つてからにせうきたい事である。



四月十二日 人ひとりを必ず善導する日

病人が殖えれば儲かると云ふので、人が病氣になるのを喜んでゐる餓鬼医者もある。人が死ねば葬式屋が繁昌すると思つて喜ぶ墓場の餓鬼もある。墮胎犯罪が多くなれば自分の仕事が増えたと喜ぶ殺人鬼もある。大体人工流産をしたがるやうな不心得な婦人には戒告しなければならぬ。大抵自分の身体が虚弱かなどで、子供を孕んだり自分が病氣になつて死んでしまふかも知れないからと思つて、自分の胎内に孕んでゐる子供を殺してしまふ氣持になるのだから、よくもそんな氣持になれたものだ。人間ならばそんな氣持になれる筈がない。人間ならば自分が死んでも子供だけは救たいと思ふ筈だ。それが人間の貴い母性である。自分の所持する『金高』が殖えるために、人工流産を奨める医者があると云ふのは何たることだ、自分の所持する『金高』と云ふのはたゞの紙切れか、アルミニウム的一片に過ぎないものなのである。そんなもののために胎内に孕つてゐる尊い『胎児の生命』を殺しても好いと云ふことは道徳上あり得べきことではない。本号の蔵居満さんの体験記を見よ。流産して羊水の中に浸つてゐながら意識を失つた胎児の精神波動が、その父なる蔵居さんの腰部に來つて、夜中五回も寢巻がビシヨ濡れになるほど多分盗汗であらうところの水がたまるのである。晝には靈界の念波の感應が弱いので、夜中だけ盗汗がたまふ。この眞理を證明するものはその流産した子供に名前をつけて、『甘露の法雨』を誦んだその夜から、此の症状が消えて了つた事實がある。



四月十一日 自己の中の餓鬼を克服する日

生長の家は「無限供給」を説くけれども「欲しい」と「たい」とをのさばらせることではない。「欲しい」と云ふのは渴慾であつて、「無限供給」の自覺あるものがなむ「欲しい」と思つたりするものか。既に無限供給の自覺ありて、その生命を、わが生命と思はず、抛げ出して君のため、國のため、公のために盡してゐるとき自然に無限供給が湧き出て来るのである。大黒様の打出の小槌も打ち揮ふときはじめてそこから小判が出て来る。打出の小槌とは自分の内にある、「生命の小槌」のことである。「生命の小槌」は打ち揮れば、打ち揮るほど無限供給が生れて来るのである。「欲しい」と云ふ渴慾自体が既に餓鬼道に墮ちた状態である。我鬼と云ふのは必ずしも貧しい入のことではない。幾らあつても「まだ欲しい」者が餓鬼である。有てるものを失ふまいとしてもかいてゐる者が餓鬼である。また有てるものを失くしてかり、それをいつまでも「惜しい」と思つて執着してゐる者が餓鬼である。物の値段が上つたからとて、あれを私が買ったから儲かつてゐたにうに惜しいことをしたと人が儲けたことを自分が損した様に思つてゐるのも餓鬼である。いくら貧しくともキリストやフランシスのやうに與へてあるいた者は餓鬼ではない、富める者だ。餓鬼にも色々の餓鬼がある。人が美人を妻にしてゐるのを見て自分が損した様に思ふ者は色餓鬼である。人が出世したのを見て自分が損をしたやうに思ふ者は名欲餓鬼である。⑤愚なる者は有と「思ふ對に捉へられて自由を失ふ。(智慧の言葉)



# 四月十日 幸福とは持物と力との調和と知る日

すべて人間の幸福は調和と平衡のとれたところから来る。度を過すと幸福がやぶれるのである。個人の自由に支配し得る心の能力と、その持物の平衡が丁度とれたときに吾々は幸福感を得るのである。四十貫目も体量のある力士は健康で快適で幸福のやうに思へるかも知れないが、その突き出た目方の重い腹は、土俵の上で敵を突き出したり、釣り上げたりするには有利かも知れないが、それは自分で操縦し得る限の限界を越えた肥り方であるがために、寝るときには、腹の重味で仰向けに寝ることが出来ない。一年に二晩位はのんびりと仰向けに寝て見たいことがあるさうだが、それすら出来ないのが彼である。それでは、横向になら樂に寝られるかと云ふと、それも中々難かしい。重すぎる腹の肉が、横に突出て、それが、それ自身の重味で下へ垂れ下りうとするので、突出た腹の横に、その支へとして座布団を二三枚當て、置かなければならぬのださうである。少し寝返りして、その横腹が支への座布団から送り出さるものなり大変である。それだから横腹が座布団から送り出さないやう、一晩中心配してゐなければならぬのが、此の肥り過ぎたお力士さんである。此のお力士さんとよく似た金持もある。自分の持物が多いために、一定の評価と云ふ座布団から送り出さないために、株式が下つたとか、地價が下つたとか云つて一晩中おち／＼安心して眠れない人々である。株券も土地も持たない貧乏人は安心してグツスリ眠つてゐるのに、持ち過ぎた金持は氣の毒なものである。



四月九日 貢獻こそ眞の幸福と知る日

人間の眞の幸福は持物が多いと云ふことでもなければ所有地が宏大なと云ふことでもない。その人の心がどんなに愛に満ちてゐるか云ふことであり。その人の心がどんなに智慧に満ちてゐるか云ふことである。持物の多さを数へて、自分より富める人々を仰ぎ瞻て羨望することは愚かなことである。持物とは畢竟「人間」そのものでもない。「幸福」そのものでもない。自分が自由に管理することも操縦することも出来ないほどの分量の持物は、或は贅肉の如く、或は癌の如く、或は肉腫の如く、その人の生命にとつて荷厄介であり、時には、その人の生命を奪ふのである。人間には自分自身で管理し得る持物の限界と云ふものがある。住友の御曹子でも住友の全財産をどうすることも出来ないのである。その九十九パーセントは番頭や、重役や、その他の會社が管理し操縦してゐるに過ぎないのである。彼にとつて「持物が多い」とは、どこかの帳簿に自分の名義として記載されてゐるところの数字が多いと云ふ幻想に過ぎないのである。眞に自分の持物とは自分が自分で自由に掃除出来、手入出来、操縦し、鑑賞し得、創造し得るところのもののみである。少々廣い庭園と雖も、もうそれは自分の眞の持物ではない。それは決して自分自身で思ふやうに手入が出来ない、たい園丁や植木職が彼の嗜好に委せて自由にする對象物である。それは却つて園丁の特物であり富豪自身のものではない。



四月八日 新釋迦誕生の日

眞の幸福は、外界から奪はれる惧れのないものである筈である。外界から奪はれる惧れのある物は、その有る分量が多いほど、奪はれる危険が多いから、それだけ戦々競々としてゐなければならぬ。だから奪はれる惧れのある物は、なるべく少くしてゐる方が心の苦痛が少いのである。この點に於て「物質なし」と云ふ生長の家の哲學は、吾々を幸福にしてくれるのである。未來に要るかも知れぬことのために、金錢をたくはへなくとも、要る時に要るものが出て來たり、それが無限供給であるのである。銀行にあづけて置いても、銀行はいつかは潰れるかも知れないし、株券を買つて置いても、その會社がつぶれて、その株券は無代になるかも知れない。さういふ時に、預金や株を持つてゐた人は悲しむが、幸ひに預金や株をもたずに、毎日働らいて感謝して、毎日の衣食を得ていた人は悲しむことはない。無産の人で、經濟統制で失業する人もあるに、けあるが、それでもそれらの人は何か、何處からか得て食べてゐるのである。眞面目に働く人なら、そして贅澤をしないと思はねばならぬ、そして信用のおける人ならば、人間は不足であり、働く人は幾らあつても足りない現代に、本當の失業と云ふものはあり得ないのである。無限供給と云ふものは、役にも立たぬ、れびうや、帳簿の中の數字が殖えることではない。れびうが殖えても、れの中」には何の實質的なものはない。総株式の下りか幾十億圓だと云つても、その下つた十日前の國の富も十日後の國の富も、大体實質に於てさう衰りはない。



## 四月七日 簡素の幸福を味ふ日

幸福は外的所有が簡素になるに従つて、その程度が聖化するのである。人間が死ぬるときに——本當は死ぬののではなく一層高き世界に移るのであるが——その一層高き世界に移るときに、一切の外的所有を吾々が捨て、行くべき外的所有をなれば、今のうちに其のやうに奪ひ合ひをしてまでも貯へなければならぬと云ふことではないのである。政府の處置のお蔭で、米やその他の必需品はそれ程に値段が上らず、金持でも餘計買へる譯ではなく、貧乏人でも働かさへすれば配給切符の必要品を求めるだけの賃金は必らず得られるのである。過去の自由主義体制で思ふまゝに競争した時代よりも、今の生活は一層楽になつて來つゝあるのである、何故なり、生活の不幸福は比較上から來る。あの入ほどに自分は贅澤は出來ない」と云ふ不平から來るからである。金持も吾々と同じやうに、生活が贅澤し得ないと云ふのであれば、金持と云ふものは「おれ」と云ふ色刷の版畫を玩具にしてゐる子供みたいなものである。その色刷の版畫は百圓と書いたたり、十圓と書いたりしてあるのを見て、大人しく也にほく喜こんだり「自分の方が少ない」と云つて悲しんだりしてゐるのは、習慣のさせる業とは云ひ條、狂人みたいなものである。日鉄の平生社長が、社長の給料を辞退したと云つて新聞に出てゐるが、生長の家の誌友は皆給料と云ふものなしに光明思想普及に働いてゐて下さるのである。



## 四月六日 我が心の王國を支配する日

人間が幸福にならうとするにはみづからを統制しなければならぬ。眼の前の些事を本當に自分で支配されないやうなことでその人の幸福はあり得る譯はないのである。第一は食欲に對する統制である。食料の配給が乏しいと云ふことは、人間を不健康にするものではない。少く食た朝は精神的に一層すかしくしいものである。断食や減食は昔かり心を清めるものとされてゐる。朝食全廢の二食主義を面勝造氏はすすめてゐる。これはもう生長しない大人には甚よいことである。寝てエネルギーを灰復しただけで、目が覺めてから何の働らきもしないのに、胃の腑にだけ物をためて、胃の腑にだけ働きを強めるのは無意味なものである。ストーヴはあまり石炭を多くつめ込んだら、その多くは燃えて煙と煤とタールになるばかりである。それと同じく、エネルギーが消耗してゐない時に無闇に詰め込まれる食物は、煙る石炭と同じことである。血管の内面にたまつた此等の不要物は血管を硬化せしめ、老衰を早め、頭腦を朦朧とせしめ、能率を低め、精神の活潑さを失はしめ、氣持の明るさを減ずる。吾々は満たりた食物で幸福が得られると錯覺してはならぬ。それはたゞ獸らしい食欲であり、貪り食べてゐる有様は不細工であり、人間らしい高尚さから獸らしい醜さに墜落する。食物は必要なる最小限度の簡素が好いのである。

◎物を捨て、も、肉体を物質だと思つてゐる限りは、無一物の生活ではない。(智慧の亭)



## 四月五日 不即不離の日

不即不離の生活が幸福の生活である。即してしまへば、そのものに捉へられる。離れてしまへば、世の中を救ふことが出来ない。飛び込んで、混乱の渦巻の中へ入れては自分自身かどの方向を向いてゐるのかも判らない。飛び込みながら離れてゐなければならぬ。

金を儲けたいのでもない。儲けるけれども握つてゐないのである。握つてゐないからとて無闇に人に與へるのでも委てゐるのでもない。随所随時にその所を得た生活を營まねばならない。吾々はどんな形の「幸福」が自分のところへ飛び込んで来ても、その「幸福」を自分のみではつかまないのである。形の「幸福」は雪達磨のやうなものであるから、自分の手でつかんでゐると、その手の温度で融けて了ふであらう。

「幸福」と云ふ人生の廣場に降つた塊は、それを次へ轉がしてやることにあつて、雪達磨のやうに大きくなつて来るのであらう。併し吾々はその雪達磨もやがて消えるべきものであることを知りねばならぬ。外界に眼に見える幸福は結局、永存的なものではない。吾れ等は雪達磨が大きいことになることに価値をみとめるよりも、吾々が、この美しく清らかな塊を次へ渡してやりうとした其の愛の心の中にこそ価値をみとめ、本當の幸福をみとめねばならない。

現象の雪達磨をとうがしなかり、實相を樂むこゝろである。



四月四日 大聖は市に隠る、日

世俗の事「無し」と知りて、世俗のことに降り来りて、世俗を救済する、これ遊戲三昧である。執するに非ず、執せざるに非ず、た、慈悲の心にて現象界の利益をと、のへるのである。

先ず自分の内界に、しかりと何物にも煩げされぬ「幸福」を形成して置かなければならぬ。大衆の批評の中に押し流され、その渦巻の中で、泥船のやうに溶かされて毀れて了ふ「幸福」きり自分が握つておかないで、大衆の盲評の中に降りて往つては、自分の幸福は摧けてしまふだけである。確乎として、何れの外界の條件にも煩はされないとろの「幸福」は、自分で何れ外的條件なしにつくり得、だもち得るのでなければならぬ。時代は激しく移りかがりつ、ある。

外のものによつて支持されてある幸福は常に時代の波濤の影響を受け、間断なく揺れつ、あるものである。揺れつ、あるものに支持されてある幸福は常に動揺するばかりにない。

吾々は毅然として、巖が波に揺かめやうに、自分の運命を自分の脚下に踏まへて立たなければならぬ。常にみづからいのち立つべきである。そのやうな者のほかに本當の幸福はなく、安心はない。

金剛不壊の幸福を先づつがむべしである。常にみづからの力でのち立つものだけが、常に安心立命の境地にあるのである。



### 四月三日 自己の力を再反省する日

神より與へられたる生命力の偉大さを信ぜよ。神より與へられたる心  
の力らの偉大さを信ぜよ。自己の生命力、自己の精神力に頼りて起て。  
他のものに頼るな。自己を信ずるは、自己に宿る神を信ずるなり。自己  
を信ぜざるは自己に宿る神を信じないものである。人間は神の子であるか  
ら、あらゆる困難に對しても、その二倍力が與へられてゐる。困難が大  
となればなる程、それに反撓し耐へる力が大となる。そこに壯大なる博  
力がありはれのである。摩擦の多きことを恐るること勿れ。摩擦は齒輪  
の廻轉する原因なり。摩擦は力を傳へるために是非必要なるなり。調帶  
車が調帶によりて動力を傳へられることを得るは、調帶車と調帶の表面  
との摩擦あるによるのである。表面の摩擦は汝を生かすつゝあるなり。  
汝を前進せしめつゝあるなり。表面の摩擦に心を捉へられずして、その  
内面の調和を見る。——これを実相を觀すると云ふなり。機関車はレ  
ールと摩擦しつゝ前進しつゝあるなり。摩擦なければ空廻りにして前進不  
可能なり。前進は実相なり。摩擦は表面なり。表面に捉へられることな  
きを要す。吾等は須く摩擦に感謝せざるべからず。あらゆる摩擦は各  
々を一步前進せしめてゐる前進は実相なり。摩擦は表面なり。われ何ん  
ぞ摩擦を怖れんや

◎世界の最大事業中の大部分は必要の拍車のもとに完成したのだ(智恵の言)



四月二日

何が来ても驚かぬ日

賢人は褒められても有頂天になりず、非難されても非観することばない。彼は褒められたときに一層反省し、非難されたときには、尚自分にそのやうな隙があつた事を反省して自己の修養に資するのである。若し群衆が聖人の言行を本當に理解することが出来るにきまつてゐるなら、彼は行動は多國から非難されなかつたであらう。吾々は人間の肉性は神聖であることを知ると同時に、人間の肉体方面の意欲には、その『神性』に反するものがある。まづなものが現れてゐることを知りねばならぬ。だからギリストは『汝を彼等のうちに遺すは羊を狼の群につかはすが如し』と云つたのである。併し吾々は、それらの個人の肉体の意欲や、群衆の妄評の中にあつても、それに捉へられてはならないのである。また捉はれる必要はないのである。吾々はもう外的條件の中に幸福をさがし求めはしないのである。吾々は『自分に自分を自分する』ことを知つたのである。自分が自分で幸福になる道を知つたのである。ひとり善がりではない。吾々はまた世界を離れて山にのかれるのではない。吾々は外界の中に住みながら、最早外界に捉はれないのである。不即にして不離である。吾々は罵られながらでも外界に對して慈悲の手をさしのべる。外界はなかつたのである。

吾が修業のために履かつた世界であつたのである。  
 ①捉はれないとは、自由な、朗かな、青空に白雲の悠々たる心境である

(智慧言葉)



## 四月一日 幸福への出發の日

自分が幸福になるためには、如何なる時、如何なる處、如何なる周圍如何なる人物の中にあつて、自分が幸福になりおけなれば

とのやうな自明の理を多くの人は忘れてゐるのであつて、自分が幸福になりおけなればなりののである。「どう云ふ風にして」と云ふやうな外的條件によつて支へられる幸福と云ふものは外的條件の動搖によつて常に動搖するものである。そして外界は常に移りかへるものであるから、一分時と雖も動搖しないのである事は難かしいものである。この動搖さけまりなき外界の條件に支へられて幸福を求むるならば、その幸福も結局は動搖するばかりではないであらう。本當の幸福は動搖しない世界に打ち建てられたものでなければならぬ。外界は動搖するから、結局、外界は吾々の幸福と云ふ建物を打ち建てるところの良き地盤ではあり得ない。吾々は内界を觀ねばならない。そしてたゞ内界にのみ幸福の建物を建てなければならぬのである。

結局、どう云ふ外界の條件で人間は幸福になるのではない。どんな外界の條件にもたよらないで、自己の幸福をこのまゝ、此處に打ち建てねばならぬのである。結局、近衛公の坐禪の師澤木興道氏が云つたやうに「自分で自分に自分を自分する」ことが幸福の秘訣である。



## 永遠の女性なるもの

生命は、それ自身の自由に委ねられたとき最も進歩し発達するものであり、若し家庭に於て、良人が妻を、妻が良人を、形で（而已）ならず心でも縛らうとするとき、その良人は思ふ存分発達することが出来ず、つねに「後顧の念」に縛られて社會へ出て充分の活動が出来なくなり、妻は自分自身獨特の個性の美しさを發揮することが出来なくなつて、その知識に於ても、感情に於ても容姿に於てもギョウな、型に嵌つた、停滞したものと成つて来るのです。其處に於て、妻は女性として、魅力を失ひ、良人の進歩に雁行して行くことが出来ず、良人の伴侶となることが出来ず、良人から愛されないとになり、其家庭は悲惨な、カラストロウフを見ることになるのであります。

妻は家婦であると同時に「永遠の女性」でなくてはならぬのであります。『永遠の女性』とは創世記の第一章にある、「神が神の像に肖りて人を造り給へり」とあるところの、「神としての女性」であります。内に既に備はつてゐる所の無限の女性美が滾々として常に顯れるところの女性でなければならぬのであります。常に一層「永遠の女性」であり常に一層新鮮美がなくてはならぬのであります。年と共に老け行く女性では無い。歳とともに愈々新鮮に「永遠の女性」美が顯れるのが本當の女性なのであります。



である。二千年前、キリストが「汝の信仰によつて汝の信ずる如くなれ」と云ふ唯一語で、遠隔の地にある病人を癒した其の真理が、すべての人類に開顯される時期が来たのである。「生長の家」を読み真理を知るだけで遠くにゐて病氣が治る事實を見よ。「生長の家」は今かの黙示録が豫言した「完成の燈臺」として人類の前に臨むのである。此の燈臺より真理の光を受くるものは、創世記のエデンの樂園追放以後人類を悩ましたところの「罪」と「病」と「死」との三暗黒を消盡するのである。光が近づくと、すべての暗黒は消える。「真理」が近づく時、すべての「迷」が消える。「迷」の産物なる「罪」と「病」と「死」とは消える。疑はずに吾が光を受けよ。「吾れは「完成の燈臺」に燈を點ずるものである。」

（昭和六年一月十五日）

◎病氣や不幸だけ神示だと思ふな。すべては自分の心の影であるから、目の届く限りすべて神示とも云へる。

（ちろのことば）



の和解が成立せねば神は助けたりても、争ひの念波は神の救の念波を能う受けぬ。國恩に感謝せよ。汝の父母に感謝せよ。汝の夫又は妻に感謝せよ。汝の子に感謝せよ。汝の召使に感謝せよ。一切の人々に感謝せよ。天地の萬物に感謝せよ。その感謝の念の中にこそ汝は吾が姿を觀、吾救を受けらるであらう。吾れは全ての総てあるからすべてと和解したもの、中にのみ吾れはゐる。吾れは此處に見よ、彼處に見よと云ふが如くにはゐないのである。だから吾れは靈媒には憑りぬ。神を靈媒に招んでみて神が來ると思つてはならぬ。吾れを招べんとすれば天地すべてのもつと和解して吾れを招べ。吾れは愛であるから、汝が天地すべてのものと和解したとき其處に吾れは顯れる。

(昭和六年九月二十七日夜)

### 完成の燈臺の神示

時が來た。今すべての病人は起つことが出来るのである。最早、あなたにとつて病氣は存在しない時が來たの



大調和の神示

汝ら天地一切のものと和解せよ。天地一切のものと和解が成立するとき天地一切のものは汝の味方である。天地一切のものが汝の味方となるとき、天地の萬物何物も汝を害することは出来ぬ。汝が何物かに傷つけられたり黴菌や悪靈に冒されたりするのは汝が天地一切のものと和解してゐない證據であるから省みて和解せよ。吾れ嘗て神の祭壇の前に供物を献ぐるとき、先づ汝の兄弟と和せよと教へたのはこの意味である。汝らの兄弟のうち最も大なる者は汝らの父母である。神に感謝しても父母に感謝し得ない者は神の心になはぬ。天地萬物と和解せよとは、天地萬物に感謝せよとの意味である。本當の和解は互に忪へ合つたり、我慢し合つたりするのでは得られぬ。忪へたり我慢してゐるのでは心の奥底で和解してゐぬ。感謝し合つたとき、本當の和解が成立する。神に感謝しても、天地萬物に感謝せぬものは天地萬物と和解が成立せぬ。天地萬物と



# 『忽然の哲學』

谷口雅春

2

忽然として無明生じ、忽然として大覺す。忽然なりざるけなし。耳朶に觸るゝ空氣の波動が心に感ぜられる忽然なり。忽然とは時間の長さの長短に非なり。物質の波動が心の波動に變じてそれが心に聽えたりとする境目は、時間無きなり。いつ物質の波動が心の波動に變じたるか。忽然の外形容し難きなり。忽然を譯してヒヨコリと云ふ。タママ牛には非るなり。嬰兒が生長して子供となり、大人となる。忽然なり。愚かなる者は或る時間的持續のうちに生長すると思へども、生長には時間的持續なきなり。想へ。一つの大きいそのもの、他の大きいさとなる。先のものが後のものと異なる形となる。異なる形異なる大きいなるにも抱らず、先のものと後のものと、別なりとせずして、先のものが後のものに生長せりと云ふは何故か、何によつて先のものと後のものが繋かれてあるか。曰く、先のものとあとのものとを結ぶものは忽然なり。牛肉の肉を食ひて、人の肉となる。併して牛が歩いてゐると云はずして「人」が歩いて居ると稱ふ。牛肉と人との境の目は何處であるか。その境目は忽然なり。牛肉が人になるのは忽然なり。すべて他物を食して人の栄養となるは忽然成るなり。病の癒るも忽然なり。餘々に治つたと思ふものは時間面に忽然が印したる病跡を見事に過ぎず。吾人毎日生生す。その「毎」は忽然なり、刻々瞬々忽然が連続して新生し、忽然が連続して生活す。この世界は忽然たるのみ、忽然上に浮ぶ世界。忽然上に浮ぶ人間。須臾にして又遠なり。「行」誌より



◎ 目 次

◎ 卷頭言

一 愛の循環

◎ 忽然の哲學

◎ 大調和の神示

◎ 完成燈臺の神示

◎ 永遠の女性なるもの

◎ 光明の音信日誌

◎ 實相體驗集

◎ 消息欄、後記

◎ 英譯生命の實相

(7) (6) (5) (3) (12) (1)

○ 愛の循環

谷口雅春

ほんとうの愛は心から與へ切ることである  
と云ふ。しかし、世の中は與へると受ける  
の持ちつ持たれつで成立つてゐる。

吾々は與へる場合もあるが、與へられ  
る場合もある。與へるばかりの愛は或る  
意味に於て片手落ちであり、自らを傲  
り易い。

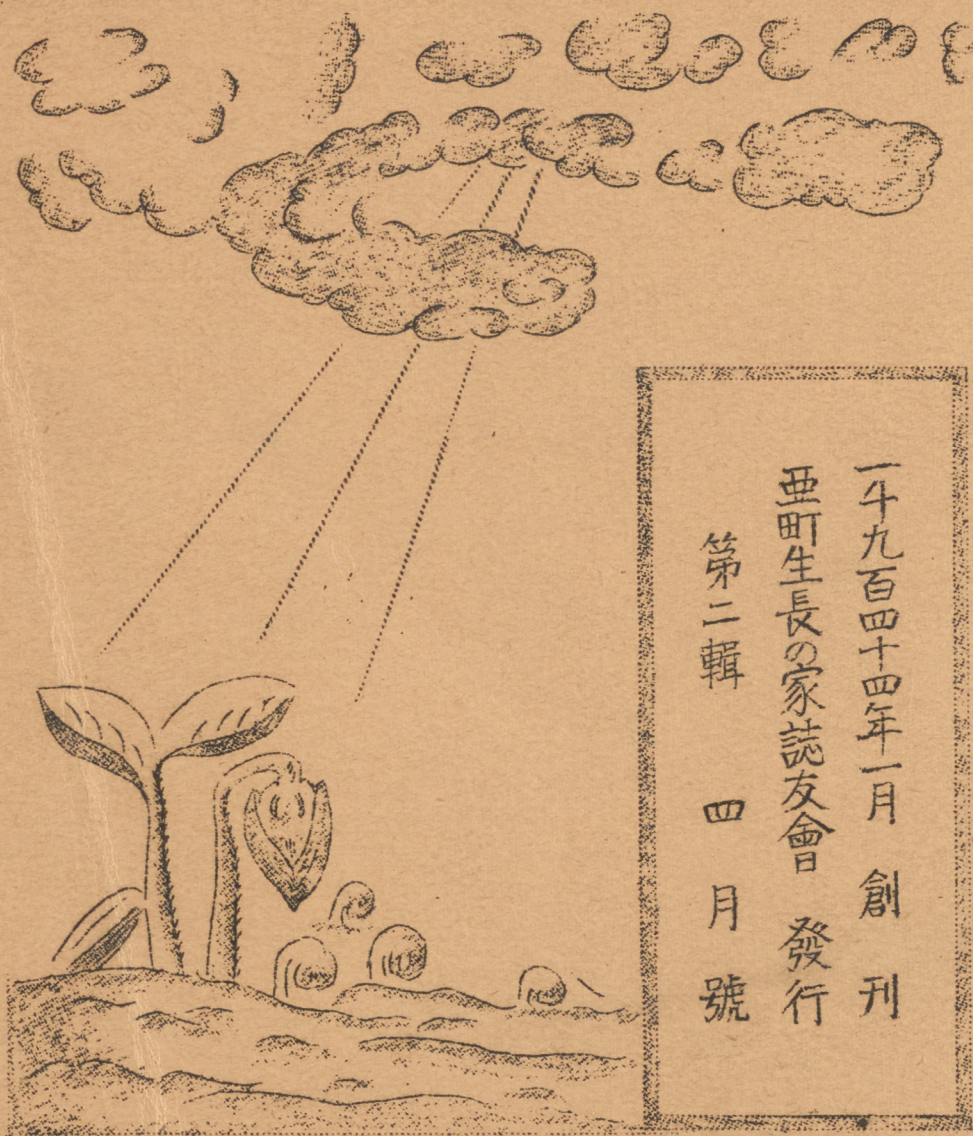
與へられた時、そのまゝ素直に有難く  
受けることは、それ自身相手の實相を  
拜むことであり、同時に與へることに劣  
らない尊い愛行である。

そして與へ切ることと、素直に感謝し  
て受けとることによつて、始めて愛は血  
液の循環の如く刻々に淨められて、人々の  
心から心へと通ふやうになる。

云ひ換へれば、愛は心から心へ通ふことに  
あつて始めて生命を持つ事になり、このあ  
いの循環こそ生かしの極致である。



# 光の音信



一千九百四十四年二月 創刊  
亞町生長の家誌友會 發行  
第二輯 四月號